2版

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科研費
KAKENHI

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ５ 月 ２４ 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５５１１０１８

研究課題名（和文）文化・社会運動研究における「アイデンティティの政治」の再文脈化

研究課題名（英文）Re-contextualization of Identity Politics in Cultural and Social Movements

研究代表者
堀江　有里（HORIE, YURI）

立命館大学・文学部・非常勤講師

研究者番号：６０５３５７５６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、マイノリティの権利獲得を求める「アイデンティティの政治」が社会運動研究やジェンダー・セクシュアリティ研究において否定的に評価されてきた経緯を踏まえ、限界を見定めた上で、その可能性や現代的意義を明らかにすることを目的とした。規範理論、在日朝鮮人研究、クィア研究から検証した際、マイノリティ集団が個別に置かれた差異と同時に、差別や排除を生み出す社会構造、マジョリティの規範形成を読み取る必要が確認された。また、様々なマイノリティ集団の社会的な困難が増殖する時代に、シングル・イシューとしてのみならず、差別の共通点をみいだすことによる横断的な反差別理論の検討も喫緊の課題であることが確認された。

研究成果の概要（英文）：　The purpose of the research project was consisted of three dimensions: 1) we tried to critic current studies that likely to underestimate the power/significances of " identity politics" in minorities' movements. 2) we tried to reevaluate of the potential of "identity politics," and to clarify importance of "identity politics" as a strategy of minorities' movement. In order to achieve these two objects, it is necessary to study both empirical and theoretical approaches. 3) Third dimension of the research project was to locate the "identity politics" in actual social problems ― especially in the situation of Zainich,Koreans in Japan, and LGBT people ― and theoretical arguments.
The research revealed investigation of cross-sectional anti-discrimination theories and practices as urgent tasks in minorities' studies in the era of social difficulties of minorities.

研究分野：社会学

キーワード：アイデンティティの政治　社会運動　差別論　エスニシティ　ジェンダー　セクシュアリティ

１．研究開始当初の背景

「アイデンティティの政治（identity politics）」とは、社会制度や社会規範のなかで排除や、差別、抑圧の対象になる人びとが、その被差別の属性と経験を基盤にして、社会的承認や再分配を求める手法である。英語圏では人文科学や社会科学の領域でも「アイデンティティ」概念自体が、ポストコロニアル研究・エスニック研究・フェミニズム・クィア理論などにおいて議論の的になってきた。

しかし、日本の文脈ではこの点が十分に理解されることなく矮小化されてきたといえる。とくに 1990 年代以降、属性横断的な貧困・格差問題への対策に社会的関心が集まるなか、「アイデンティティの政治」は被抑圧者の主張に対するレッテルとして転用され、むしろマイノリティ集団の「スティグマ化」をもたらす傾向にある等と批判されてきている。

本来、「アイデンティティの政治」は、再分配要求とは必ずしも重ならない社会的承認（「差別からの解放」）を求める実践であるが、その意義を肯定的に評価する議論と、その効果の限定性や否定的側面に着目する批判論とに分かれている。肯定論は、社会的不利益が一定緩和された後も、現に被差別・被抑圧状況は見えにくいかたちで継続していることを重視し、解放実践としてのみならず、当の状況の分析枠組みとして「アイデンティティの政治」を評価する。他方、批判的な議論は、被差別属性を強調すると、ひとつの属性を主軸としたマイノリティ集団内の少数派を抑圧する構造が生まれ、個人のアイデンティティの複合性・多元性を捨象してしまう、と指摘する。

日本では、1990 年代以降、おもに批判的議論の影響を受けて「アイデンティティの政治」の限界や問題点を指摘する議論が展開されてきた。しかし、英語圏では、その実践的および社会分析枠組としての意義を評価する研究も多く蓄積されてきている。こうした「アイデンティティの政治」の意義と可能性をめぐる研究蓄積が十分に検討されず、それに基づく議論が展開されてこなかったことは、日本の社会運動をめぐる文化研究（ジェンダー・セクシュアリティ研究やエスニシティ研究をはじめとして）にとって大きな妨げにもなっている。

２．研究の目的

本研究の目的は、マイノリティの権利を実現してきた「アイデンティティの政治」が、日本の社会運動研究、ジェンダー・セクシュアリティ研究、エスニシティ研究の領域で否定的に評価されてきた経緯を踏まえた上で、その積極的な可能性を論じ、現代的意義を明らかにすることである。

そのため、「アイデンティティの政治」概念に関する英語圏の議論を体系的に分析し、フィールドでの丁寧な記録と分析を実証的に行い、日本の文化研究・社会運動をめぐる研究に寄与することを目的とする。

本研究では、日本における「アイデンティティの政治」をめぐるこれまでの議論で見失われてきた積極的可能性を明らかにすることを追究してきた。そして、この課題を達成するため、具体的には以下の三本柱を設定し、これらを有機的に結びつけることで「アイデンティティの政治」の日本への再文脈化を図ろうとするものであった。

(1) 性的マイノリティのアイデンティティ戦略と政治

本パートでは、1990 年代以降、性的マイノリティをめぐる運動／研究を事例に理論的考察を行なうと同時に、参与観察などをとおして実証研究を行なうことを目的としてきた。具体的には、①日本におけるレズビアン・アイデンティティを軸とするコミュニティ形成、②トランスジェンダーの労働問題の二つを検討する。これらから性別二元論と異性愛主義の現象を考察し、性的マイノリティのあいだにあるコンフリクトの架橋を試みてきた。また、現在、日本では、まだ記録の蓄積が大きくは進んでいない性的マイノリティの置かれた実態を明らかにすることで、学問分野への貢献のみならず、アウトリーチや知見蓄積をもって当該コミュニティの生活世界に還元することを目指すものであった。

(2) 在日朝鮮人女性の〈生〉をめぐる諸相

本パートでは、複合的な差別の中で構成される在日朝鮮人女性のアイデンティティの諸相を捉える理論枠組みの構築を目指すと同時に、インタビュー調査を通じて実証研究を行なうことを目的とした。具体的には①在日朝鮮人による社会運動および「在日論」を「アイデンティティの政治」という枠組のなかに位置づけなおし、その質的変化を追うことでアイデンティティの政治に固有な主張を明らかにする。②インタビュー調査を行うことにより、在日朝鮮人女性の実態を探る。②に関して、本パート担当者は 2004～2005 年にかけて実施された在日朝鮮人女性を対象とした数的調査（反差別国際運動日本委員会発行、2007、『立ち上がりつながるマイノリティ女性』）の原資料の管理を委託されその使用許可を得ている。この資料にさらなる分析を加えつつ、調査上の偏りを埋めていくことで在日朝鮮人女性が置かれている現状および課題を明らかにするものであった。

(3) 「アイデンティティの政治」の理論的位置価の再検討

本パートでは「差別」と「アイデンティティ」に関する従来の議論の問題点を理論的に明確化し、「アイデンティティの政治」を適切に評価するための理論枠組みを構築することを目的とした。日本の差別論は、とくに、

社会学を中心として展開されており、そこでは、被差別カテゴリーおよびアイデンティティを基盤とした反差別戦略には限界があるという認識が共有されつつある。他方、英語圏では、とくに規範理論における差別研究のなかで、差別の不当性と「カテゴリー」の連関性について、日本の議論とは異なる分析が展開されており、重要な知見が提示されている。本パートでは、これらの議論を踏まえて、日本の議論の前提となる差別理解を総括的に吟味し直し、「アイデンティティの政治」の理論的位置価を、規範理論の観点から見定めることをめざした。

３．研究の方法

本研究プロジェクトのメンバーは、「アイデンティティ・ポリティクス研究会（仮）」として、他メンバーも含め、すでに研究定例会を 2007 年度より実施してきている。その継続性のなかで、互いに研究成果を参照して担当分野の研究の深化をはかるとともに課題研究全体の方向性を確認してきた。

日本の文化・社会運動研究において「アイデンティティの政治」概念の再生を試みる本研究プロジェクトは、（１）英語圏での議論を体系化し、日本の文脈との比較を行なう理論的研究、（２）マイノリティの生活空間や社会運動において「アイデンティティの政治」を記録し分析する実証的研究を実施するという方法を採用した。

研究方法は（１）は文献研究を中心に、（２）は参与観察とインタビュー調査などを中心に検討してきた。

４．研究成果

「アイデンティティの政治」について限界を踏まえて批判的に考察しつつ、その可能性を探る本研究においては、４年間（期間延長一年分を含む）の研究活動によって、規範理論、エスニシティ研究、クィア研究という学際的なアプローチにより、共同研究を進めてきた。その結果、（１）マイノリティにスティグマを付与し、排除や差別、抑圧を促進するようなマジョリティの社会規範が形成される契機とその駆動について詳細に検討する必要性、（２）マイノリティの属性をもつ諸集団の領域横断的な、あるいは差別論全般を射程に入れた反差別理論を構想する必要性の双方が、喫緊の課題として確認された。

まず、（１）マジョリティによる社会規範の形成について。本研究プロジェクトが始動した時期、大学や市民社会におけるヘイト・スピーチ（差別扇動行為）などの排外主義が顕在化し、増幅しはじめる時期でもあり、いわゆるマジョリティ属性をもつ人びとによる「アイデンティティの政治」が遂行される傾向がみてとれた。

そのような情況のなか、在日外国人や性的マイノリティという個別のマイノリティ集団が置かれた状況の実態を掘り下げることの必要性と同時に、差別や排除を生み出す社会構造や、マジョリティの規範形成を読み取る必要性が確認された。言うまでもないことではあるが、マイノリティの属性をもつ人びとに対する排除・差別・抑圧の問題は、マジョリティによる社会規範の（再）生産と維持が生み出す結果にすぎないからである。

このような情況は、「アイデンティティの政治」への批判が日本でも隆盛しはじめた 1990 年代とは大きく異なる社会状況のなかで起こっているものでもある。そこから、あらたなかたちでのマイノリティ当事者の主張する「アイデンティティ」が差別・人権侵害の具体的な事象のなかで「呼び出される」ことによって喚起される対抗手段としていまだ有効であること、もしくは必然性を伴っていることを確認することができた。

これらの考察は、同時に（２）マイノリティの属性をもつ諸集団の領域横断的な、あるいは差別論全般を射程に入れた反差別理論を構想する必要性を確認することにもつながった。マイノリティの権利獲得運動として立ち上がってきた「アイデンティティの政治」を再考するにあたり、マジョリティ（“われら”）／マイノリティ（“かれら”）という区分が社会におけるさまざまな場面で形成されていく実態を読み解くだけではなく、領域横断的な視点、また、共通する反差別理論を射程に入れる視点が必要となる。在日外国人や性的マイノリティなどのマイノリティが領域を横断して社会運動を形成していく諸相は、すでに 2010 年代以降、ひろがりつつある。そのようななか、学問の領域においても、シングル・イシューとしてのみならず、差別の共通点をみいだすことによる横断的な反差別理論の検討も喫緊の課題である。

本研究プロジェクトでは、哲学・倫理学の領域のなかでも規範理論における差別論の理論的検討を行い、差別が、特定の歴史的文化的のなかでの集団間の立場（ポジション）の違いを条件としているという点を、「集団基準」に関する議論の考察を通して再確認した。

これらの研究については、適宜、学会報告や論文執筆を行なうことによって、途中経過や研究成果の報告を世に問うと同時に、以下のプロジェクト等との協力関係のもと、研究の還元を行なってきた。

まず、関西圏の大学で起こった、マイノリティの属性をもつ女性教員への学生によるヘイト・スピーチについて、大学の対応等への問題から、学内外の非正規雇用者（非常勤講師や TA/RA などを担う大学院生など）を中心として抗議の声があがった。2014 年度には、その抗議運動を担い、頻出する諸大学キャンパスでのヘイト・スピーチや差別問題を検討するため、公開講演会を開催することで、研究成果の還元を試みた。公開講演会は、師岡康子氏（弁護士／大阪経済法科大学客員研究員）を講師に「教育現場とヘイトスピーチ―

一師岡氏を招いて」をテーマとして開催した（2014 年 4 月 27 日（日）、於・立命館大学（衣笠）創思館 303・304 教室、共催：立命館大学ヘイトスピーチ事件の解決を求める有志、立命館大学コリア研究センター）。約 120 名の参加者を得ることができた。

また、ジェンダー／セクシュアリティの領域において、理論と実践の架橋を試みる研究活動を継続している、立命館大学生存学研究センターのプロジェクト「フェミニズム研究会」との協力により、合同研究会を定期的に実施したうえ、2013～2016 年度のうちに、公開研究会を 8 回実施したほか、『〈抵抗〉としてのフェミニズム』（立命館大学生存学研究センター報告第 24 号、2016 年、堀江有里・山口真紀・大谷通高編著）を刊行することができた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 33 件）

①堀江有里、「〈結婚〉をめぐる抗争 ――同性間パートナーシップの法的保護と可視化戦略の陥穽」、『世界人権問題研究センター研究紀要』、査読有、第 20 号、2015 年、277–301 頁

②金友子、「ヘイトスピーチの『被害者』になること」、『インパクション』、査読無、第 197 号、2014 年、108–115 頁。

③堀田義太郎、「差別煽動としてのヘイトスピーチの悪質さ」、『生存学』、査読有、第 9 巻、2016 年、10–25 頁

〔学会発表〕（計 41 件）

①堀江有里、 Mourning and Distance between Life and Death: Possibilities of Queer Theology in Japan, The 10th Crossroads in Cultural Studies Conference, 2014 年 7 月 3 日、タンペレ・ホール（フィンランド・タンペレ）

②金友子、「60 年代在日韓国人学生の日韓条約反対闘争：日本での居住権をめぐって」、第 3 回東国大学校文化学術院叙事文化研究所学術大会、2016 年 9 月 10 日、東国大学校（韓国・ソウル）

③堀田義太郎、「特定の集団の成員に対する差別は、なぜ特に悪質になるのか：集団基準と行為の意味」、日本哲学会第 75 回大会、2016 年 5 月 14 日、京都大学（京都府・京都市）

〔図書〕（計 6 件）

①大越愛子・倉橋耕平編著、昭和堂、『ジェンダーとセクシュアリティ：現代社会に育つまなざし』、2014 年、全 234 頁、堀江有里（123–146 頁）・堀田義太郎（183–223 頁）分担執筆

②堀江有里、洛北出版、『レズビアン・アイデンティティーズ』、2015 年、全 363 頁

③堀江有里・山口真紀・大谷通高編著、立命館大学生存学研究センター、『〈抵抗〉としてのフェミニズム』（立命館大学生存学研究センター報告第 24 号）、2016 年、全 266 頁、金友子（105–123 頁）・堀江有里（124–152 頁）・堀田義太郎（207–224 頁）分担執筆

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者

堀江有里（HORIE, Yuri）
立命館大学・文学部・非常勤講師
研究者番号：60535756

(2)研究分担者

金友子（KIM, Woo Ja）
立命館大学・国際関係学部・准教授
研究者番号：20516421

堀田義太郎（HOTTA, Yoshitaro）
東京理科大学・理工学部・講師
研究者番号：70469097

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

なし